

マイモニデスの銅像・墓・ヘブライ語表記

泉 彪之助

思想史上も医学史上も重要な人物なのに、モーゼス・マイモニデスは日本人にあまり知られていない。私も、その一人であった。

留学したとき私は、ニューヨークにあるブルックリン・マイモニデス病院を通じて政府基金の給付を受けた。マイモニデスはユダヤ人の偉い学者だと聞いたが興味を持たず、近くの本屋にあったマイモニデスの伝記も買おうとしなかった。意識したのは、スペイン史とユダヤ人史に関心を持つてからである。

マイモニデスの医学上の業績は、優れた研究書が出ているのでそれを参照していただきたい。⁽¹⁾ここでは、銅像(コルドバ、スペイン)、墓(テイベリア、イスラエル)、および名前前のヘブライ語表記について報告する。

後にのべるように、マイモニデスの墓はユダヤ人の信仰の対象となっており、単なる史跡として扱うべきではないことを強調したい。

一・マイモニデスの時代と土地

マイモニデスは、一一三五年にスペインのコルドバで生⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾まれた。

八世紀から一五世紀末にいたるイスラム・スペインの時代、ユダヤ教とキリスト教の信仰を認めるアラブ人の宗教的

寛容の下で、ユダヤ人は政治でも文化でも重要な役割を果たした。ユダヤ戦争の敗北によって故国を追われ、各地に離散したユダヤ人が、スペインに安住の地を得たのである。その結果、スペインはユダヤ人史に重要な国となつた。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

ヨーロッパ出身のユダヤ人は、東欧系のアシケナージとスペイン系のセファルディに分けられる。前者の共通語は、中高ドイツ語に基づいたイディッシュ語であり、後者は、スペイン語を元にしたラディノ語である。スペインのユダヤ人は、一四九二年にカトリック両王によってスペインから追放されたが、前述の歴史からセファルディという系統として残つた。

イスラム・スペインの時代、イベリア半島は、シチリアと並んで、アラビア文化とアラブ人によって保存されていたギリシャ文化の、ヨーロッパへの主要な伝達路となつた。その中心がコルドバで、コルドバはヨーロッパ第一の大都会となつただけでなく、学術の府としてヨーロッパ中から留学生が集まつた。最盛期の人口一〇〇万、モスク七〇〇、図書館七、その蔵書数四〇万冊、学寮二七、大学生六〇〇〇人といわれる。⁽⁶⁾

マイモニデスが生まれたのは、こうした環境においてである。マイモニデスの少年時代、コルドバはアルモハド族（ムワッヒド朝）の支配を受け、マイモニデスは父親たちと共にコルドバを去つた。彼らはモロッコのフェズで暮らした後、パレスチナのアッコ、エルサレムを経て、エジプトのカイロに定住した。カイロでマイモニデスは、サラディンの宮廷の侍医となるなど医師として活躍しただけでなく、ユダヤ人団体の思想的指導者として大きな功績を残し、中世最高のユダヤ教学の思想家となつた。⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾マイモニデスの業績は、三つに分けられる。ヨーロッパ思想への貢献、ユダヤ教への貢献、医学を始め諸学芸への貢献である。

マイモニデスは、一二〇四年、カイロで死去したが、遺志によりモーゼのたどつた道を通じてティベリアへ運ばれ、そこに葬られた。⁽³⁾

二．マイモニデスの銅像

私がコルドバにマイモニデスの銅像があることを知ったのは、あるガイドブックであった。原本が手元にはないが、『旅のガイドムック スペインの本』（近畿日本ツーリスト刊）であったと記憶している。他のガイドブックには、そのことは書かれていなかった。



写真1 マイモニデスの銅像
(コルドバ・スペイン)

コルドバへは団体で行ったので、銅像の詳しい位置を示すことができない。しかし観光経路のユダヤ人街の入り口にあり、見付けられるはずかしくないと思う（写真1）。碑銘には、「BEN MAIMONIDES TEOLOGO FILOSOFO MEDICO（神学者、哲学者、医師）CORDOBA 1135 EL CAIRO 1204」と書かれている。コルドバには、マイモニデスというホテルもある。また「世界で最初に白内障を手術した医師」の胸像もあるが、浅学のためだれか分からなかった。

三．ガリラヤとティベリア

マイモニデスの墓は、イスラエルのティベリア(8)(12)(13)にある。ティベリアは、イスラエル北部のガリラヤ湖西岸にあり、この地方の中心都市である。

ガリラヤ地方は、イエス・キリストと関係が深いところである。イエスの母マリアは、ガリラヤ湖と地中海の中間にあるナザレで天使から受胎を告知され、人口調査の申告のため夫ヨセフと共におもむいたベツレヘムでイエスを生んだ。

イエスはナザレで青年時代を送ったが、宗教者としての自覚を得て公的生涯を始めたのがガリラヤ地方である。しかし
ティベリアは、キリスト教でなくユダヤ教の聖地となった。

ティベリアは、ヘロデ王の子ヘロデ・アンチパスが創り、第二代ローマ皇帝ティベリウスにちなんで名付けた町である。⁽¹²⁾
聖書にでてくるポンテオ・ピラトをユダヤ総督に任命したのが、ティベリウスであった。

紀元七〇年、ユダヤとローマの間に戦われた第一次ユダヤ戦争がユダヤ側の敗北に終わり、エルサレムが陥落して神
殿が焼かれた。ユダヤ人の最高自治機関サンヘドリンはガリラヤ地方に逃れ、二世紀にティベリアへ落ち着いた。ユダ
ヤ教の学府もティベリアへ移り、ここで二世紀ごろに口伝律法ミシュナが、四世紀末にその解説書の一つ、エルサレム・
タルムードが編纂された。⁽⁷⁾⁽⁸⁾エルサレムと銘打たれているが、実際に編纂されたのはティベリアである。後にマイモニデ
スは、タルムードに関する著作を著すことになる。

このような歴史からティベリアはユダヤ教の聖地となり、マイモニデスだけでなく、ローマ帝国へのバル・コフバの
反乱に加わって処刑されたラビ・アキバ、あるいはユダヤ教の偉大な指導者として著名なラビ・ヨハナン・ベン・ザカ
イ、ラビ・メイルらの墓もある。⁽⁹⁾

現在のティベリアは、ガリラヤ観光の中心として賑わっている。ティベリアにはローマ時代から続いている温泉があ
り、ローマ時代の温泉医療施設の遺跡も残っている。

四．マイモニデスの墓

ティベリアでは、移動の途中に短時間、グループを離れて墓を訪ただけで、また地図を入手できなかったもので、詳
しい街路名を示せない。旅行社から恵与された簡単な街路図のコピーによると、墓はティベリアの中央バスセンターの
すぐ近くにあり、訪れた印象も町の中心部であった。

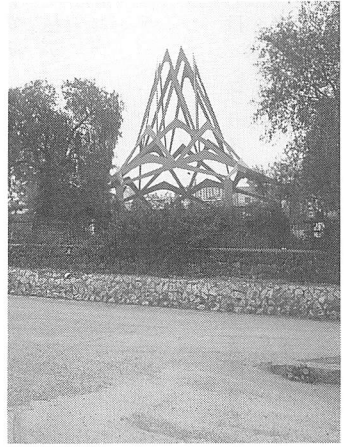


写真2 外から見たマイモニデスの墓（ディベリア・イスラエル）

外から見ると、墓の上に火炎を思わせるような大きな飾りがあり、その場所を知ることができる（写真2）。入り口から墓まではゆるい階段が続



写真3 マイモニデスの墓（ディベリア・イスラエル）

き、それを上ると半円形の墓域になっていて、中心にかまぼこ形の墓がある（写真3）。別の場所にあるラビ・アキバの墓もかまぼこ形をしているので、これがユダヤ教ラビの伝統的な墓の形なのかも知れない。墓域の壁に銘板があり、その一つにローマ字でマイモニデスと書かれていた。

私が訪れたとき、二人のユダヤ人信者が墓の前で祈りを捧げていた。祈りの邪魔をしたり、だまって写真を撮ったりするのを避けて、祈りが終わるのを待っていたが、なかなか終わらなかつた。一人が不審の目をむけるので、英語で「私は日本の医史学研究者ですが、墓の写真を撮ってよろしいでしょうか」と話しかけたが、「英語が分からない」という。もう一人もそばへ来たので、その人にも聞いたが、やはり英語は分からないとのことであった。後の人にドイツ語で「ドイツ語は分かれますか」と聞いたら、「イディッシュなら分かる」という。ドイツ語で「墓の写真を撮りたいのです」と

言ったら分かってもらえ、快く場所を空けてくれた。そうした二人の好意を受けて撮影したのが、ここに掲げた写真である。二人と別れるとき、ドイツ語でお礼を言ってお帰ってきた。

このような経緯からも、墓の訪問は慎重でなければならぬことが分かる。

五. マイモニデスの名前のヘブライ語表記

マイモニデスは、ヘブライ名をモシエ・ベン・マイモン、アラブ名をアブ・イムラン・ムサ・イブン・マイムーンという。欧米ではモーゼス・マイモニデスと呼ばれるが、これはラテン名である。⁽³⁾モシエは日本というモーゼ、ベンは息子なので、ヘブライ名は、「マイモンの息子のモーゼ」という意味である。

イスラエルでは、マイモニデスはランバムと呼ばれる。モシエ・ベン・マイモンの語頭にユダヤ教師ラビという言葉を加え、その頭文字を続けるとRMBMとなる。これに母音を付加したR(a)MB(a)M(この表記の理由は後述)が、その呼び方である。ランバムという呼び方は日本では知られておらず、私が見た中ではランダムハウス英和辞典に出ているのみであった。⁽¹⁴⁾

私が、ティベリアにマイモニデスの墓があり、マイモニデスがイスラエルでランバムと呼ばれることを知ったのは、『ユダヤ教の本』(学研刊)⁽⁸⁾からである。

ティベリアでは、マイモニデスの墓は史跡・信仰の対象として重視されており、交通標識にも「ランバムの墓」とヘブライ語と英語で記されているので、ヘブライ語が読めなくとも訪れることは可能である。しかしランバムという呼び方は、ヘブライ語の規則を知って理解できるので、その点を説明したい。誤って「ランバンの墓」としているガイドブックがあるが、⁽¹⁵⁾後に述べるようにランバンは別人である。

「マイモニデスの墓」のヘブライ語表記を、再構成して写真4に示した。これを読むため、ヘブライ文字の読み方の基

本を記す。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

(一) ヘブライ語は、アラビア語と同じセム語系の言葉で、右から左へ読む。

(二) ヘブライ文字(アレフベート)は二文字あり、すべて子音をあらわす。大文字、小文字の区別はなく、異なった字が同じ発音を示す場合もある。

(三) 従って文字だけでは発音が分からないので、文字に付け加えられて母音を示す記号が発明された。これをニクダ¹ーといい、五つの母音と一つの半母音を示す。しかし普通は、ニクダ¹ーは書かれない。語学書は、ニクダ¹ーを日本²のふり仮名にたとえている。

(四) 母音を示すため子音に追加される文字があり、準母音と呼ばれる。この文字は、ニクダ¹ーと組み合わせられて一定の母音を示す。

(五) 文字のまん中に点(ダゲツシュ)が書き加えられて、発音と文字の名前が変わる場合がある。ダゲツシュも、一般には書かれない。

(六) 文字の上に点があり、それが右にある場合と左にある場合とで発音が変わるものがある。この点も、普通は書かれない。

(七) 語尾に来ると、文字の形が変わるものがある。語尾の字形を³ソフイート(例・カフ⁴ソフイート)という。

(八) 語尾の⁵ハは発音されない。

今、写真の表記をヘブライ文字の名前で書く(右↓左)と、クフ・ヴェート・レーシュ・ヘー・レーシュ・ムム・ベート・(二重引用符)・ムムソフイートとなる。ペーは、ヴェートにダゲツシュがついた字である。二重引用符は略語を示す記号なの



写真4 「マイモニデスの墓」
ヘブライ語表記

でこれを除き、ヘブライ文字をローマ字に置き換え(右↓左を左↓右に改める)、ニクダーを括弧付きの小文字ローマ字で付け加えると、K(e)V(e)R H(a)R(a)M B(a)Mとなる。K(e)V(e)Rは墓、H(a)はヘブライ語の定冠詞で、英語の定冠詞と同じく限定を示す。このように二つ以上の名詞が連結してできた熟語を連結語と呼び、被修飾語が先に、修飾語が後に来る。したがって直訳すると、「かのラビ・マイモニデスの墓」という意味になる。

墓では、かまぼこの切口にあたるところに墓碑銘があり、その中心にモシエ・ベン・マイモンの名がヘブライ語で書かれている(写真3)。その文字名と発音を書くと、「MEM・シン・ヘー ベート・ヌンソフイート MEM・ユッド・MEM・ヴァヴ・ヌンソフイート(右↓左)」(M(e)S H(e)H B(e)N M(a)Y(i)M(o)VN(左↓右)。SHは一字。YとVは準母音で発音されない)となる。

六. ランバムとランバン

先へのべたように、あるガイドブックはランバムとランバンを混同しているが、それも無理がないほど、この二人は名前も経歴も業績も似ている。

ランバムをヘブライ文字で書くと、レーシユ・MEM・ベート・(二重引用符)・MEMソフイートだが、ランバンは、レーシユ・MEM・ベート・(二重引用符)・ヌンソフイートで、最後の文字だけが異なっている。ランバンのヘブライ名は、モシエ・ベン・ナフマン(Nahman)(一一九五―一二七〇)で、ラテン名をナフマニデス(9)(10)(18)(19)と呼ぶ。スペイン出身のタルムード学者であり、スペインを追われてエルサレムに住んだ。彼の活躍した場として、エルサレム旧市街のユダヤ人地区にランバン・シナゴグの旧跡が残っている。

私は、イスラエルに行くまでランバムとランバンの差が分からなかった。最初に、ガイドの高橋氏がランバンが別人であることを教えて下さった。エルサレムで泊まったホテルが偶然にもランバン街にあったところから、ホテルのフロ

ントで聞いたところ、フロントの女性は「ランバンは、マイモニデスではない」という意見であった。幸いなことに、そのやり取りを聞いていたホテルのマネージャー、バルマツツ氏が大学でマイモニデスを専攻している人で、そのことを確言されただけでなく、ユダヤ教におけるマイモニデスの業績について解説して下さった。さらに私はランバン・シナゴグを訪れ、その銘板からもランバンが別人であることを確認した。⁽¹⁸⁾

ランバンについて、日本の西洋人名辞典や歴史事典にまったく出ていないので、ここに記載した。

謝辞

この研究に種々の援助を与えられた(株)ミルトス・イスラエル 高橋是清氏、エルサレム・キングズホテル Moshe Barnatz 氏に深謝する。

文献

- (1) Fred Rosner et al. (ed.): Moses Maimonides, Physician, Scientist, and Philosopher, Jason Aronson Inc., Northvale, New Jersey and London, 1993
- (2) Moses Maimonides, transl. by M. Friedländer: The Guide for the Perplexed, Dover Publications, Inc., New York, a new paperback edition of the first publication in 1956
- (3) 『岩波西洋人名辞典増補版』、岩波書店、一九九二年
- (4) W. M. ワット著、黒田寿郎・柏木英彦訳『イスラム・スペイン』、岩波書店、一九七六年
- (5) 余部福三『アラブとしてのスペイン』、第三書館、一九九二年
- (6) 東潔『スペイン歴史紀行ーレコンキスタ』、振学出版、一九九二年
- (7) マルサ・モリスン、ステイーヴン・F・ブラウン著、秦剛平訳『ユダヤ教』、青土社、一九九四年
- (8) 『ユダヤ教の本』、五七頁、一一二頁 学習研究社、一九九五年
- (9) マックス・I・デイモント著、平野和子・河合一充訳『ユダヤ人の歴史』、ミルトス、一九九四年

- (10) マックス・I・デイモント著、藤本和子訳『ユダヤ人、神と歴史のはざままで(上)』、朝日新聞社、一九九三年
- (11) 『旅のガイドムック スペインの本』、近畿日本ツーリスト、年失記
- (12) ミルトス編集部編『イスラエル・ガイド』、ミルトス、一九九四年
- (13) “Tiberias and the Sea of Galilee”, 12p., Bonechi & Steinatzky, Firenze, 1993
- (14) 『小学館ランダムハウス英和大辞典 第三巻』、五九六頁、小学館、一九七四年
- (15) 『地球の歩き方 イスラエル』、八八頁、ダイヤモンド・ビッグ社、一九九四年
- (16) 佐藤淳一『はじめてのヘブライ語』、ミルトス、一九九三年
- (17) 神藤耀ら編『ヘブライ語入門』、キリスト聖書塾、一九八五年
- (18) ランバン・シナゴーク銘板、エルサレム
- (19) ダンIIハバト著、高橋正男訳『図説 イエルサレムの歴史』、六三頁、東京書籍、一九九三年

(老人保健施設 陽翠の里)